〔論 文〕

過去の課外活動経験の有無と競争心の関係

Influences of past experiences of extracurricular activities to the competitive spirits of college students

関　口　洋　美
Sekiguchi Hiromi

大分県立芸術文化短期大学
研究紀要　第54巻
2017年3月

〔論　文〕

過去の課外活動経験の有無と競争心の関係

Influences of past experiences of extracurricular activities to the competitive spirits of college students

関　口　洋　美
Sekiguchi Hiromo

ABSTRACT

In the present research I carried out a questionnaire investigation to 93 junior college students in order to make clear the influences of the experiences of extracurricular activities during elementary school days, junior high school days, and senior high school days to the competitive spirits. Results showed that the cultural activities had stronger influences than the athletic activities on their competitive spirits. Particular, experiences of cultural extracurricular activities at the age of elementary school days tended to raise his/her competitive spirit.

Key Words：　competition, self-efficacy, extracurricular activities

はじめに

学校教育における評価は、2002年を境に「絶対評価を加味した相対評価」から「絶対評価」へと変更された。2002年度全国一律「絶対評価」への移行の前に、段階的に「絶対評価」へと移行し始めたのが2000年である。この少し前の時代から、学校における競争が激減していった。特に世の中を驚かせた話題として、運動会の徒競走では順位を決めず、全員が手をつないで走り全員でゴールするというものがあった。しかし近年、スーパーコンピュータ「京」の開発や、国際学力テスト（PISA）における順位など、世界との競争を意識したニュースが多くみられるという現状がある。

現在の学生のほとんどは、学校においては絶対評価によって評価されてきた。このような学生たちの競争心にはどのような特徴があるのだろうか。学校での競争が減っている中で、彼らが競争を経験するのは課外活動においてが中心となってきたであろう。部活動や習い事などでの試合やコンクールなどの経験が、今の競争心に影響しているのではないだろうか。特に試合の多い団体での運動競技の経験があるほうが、競争心が高いのではないかと考えられる。

また、競争による成功感・失敗感から彼らは何かをするにあたっての方略を身に着けてきたはずである。バンデューラ（Bandura, A）は、何か結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくできるかという個人の確信のことをセルフ・エフィカシー（self-

efficacy）とよんだ。戸倉・管（2014）では、大学生のセルフ・エフィカシーに影響を与える要因について調査している。その結果、多次元的自我同一性尺度との正の相関が認められ、自分は自分であるという一貫性を持つことと、どのように成長し、これからどのように変わっていくかをはっきりと感じることでセルフ・エフィカシーが向上するとした。また、青年用適応感尺度との正の相関も認められ、自分の置かれた環境に適応していると感じることができるとセルフ・エフィカシーが向上すると考えた。これらの結果から、セルフ・エフィカシーは競争心とも関連があるのではないかと思われる。

以上のことから、本研究では学校での生活が始まったころから絶対評価によって評価されてきた現在の学生に対し、その競争心を調査するとともに、これまでの課外活動の経験の有無がどのように影響しているのかを明らかにすることを目的とする。また、セルフ・エフィカシーについても調査し、競争心との関係を明らかにする。

方　法

協力者：大分県立芸術文化短期大学の学生93名。美術科４名（女子３名、男子１名）、音楽科36名（女子31名、男子５名）、情報コミュニケーション学科53名（女子49名、男子４名）。

調査日：2016年11月２日、11月７日、11月８日に実施した。

質問紙：質問紙は「一般的競争心尺度」、小中高における課外活動に関する質問、「一般的セルフ・エフィカシー尺度」の３つで構成した。「一般的競争心尺度」は、関口（1998）を使用した。本尺度は、「負けたくない因子」「目立ちたい因子」「試したい因子」の３因子構造であり、各因子５項目ずつからなる15項目で構成されている。項目は、因子がバラバラになるようにランダムに並び替えて使用した。小中高における課外活動については、それぞれの時期における団体の運動競技、個人の運動競技、団体の文化活動、個人の文化活動についての経験の有無を尋ね、経験がある場合には具体的な内容を記入してもらった。「一般的セルフ・エフィカシー尺度」は、坂野・東條（1986）を使用した。本尺度は、行動の積極性の７項目、失敗に対する不安の５項目、能力の社会的位置づけの４項目の計16項目からなり、それぞれYesまたはNoで回答する。

手続き：筆者が質問紙を配布し、その場で回答させて回収した。

結　果

＜質問紙の単純集計から＞

競争心尺度からは、負けたくない得点、目立ちたい得点、試したい得点（いずれも５～25点）と３得点を合計した競争心得点（15～75点）を算出した。いずれも、得点が高いほどその傾向が高いことを表している。競争心尺度の平均値は、負けたくない得点13.56（SD=3.85）、目立ちたい得点20.39（SD=2.81）、試したい得点15.86（SD=3.61）、競争心得点49.81（SD=6.83）であった。

小中高における課外活動に関する質問については、小中高での課外活動の有無は以下のようになった。小学生の時には、団体の運動競技をやっていた人は32名（34.40％）、個人の運動競技をやっていた人は30名（32.30％）、団体の文化活動をやっていた人は17名

（18.30%）、個人の文化活動をやっていた人は55名（59.10%）であった。中学生の時には、団体の運動競技をやっていた人は25名（26.90%）、個人の運動競技をやっていた人は24名（25.80%）、団体の文化活動をやっていた人は34名（36.60%）、個人の文化活動をやっていた人は40名（43.00%）であった。高校生の時には、団体の運動競技をやっていた人は13名（14.00%）、個人の運動競技をやっていた人は７名（7.50%）、団体の文化活動をやっていた人は34名（36.60%）、個人の文化活動をやっていた人は44名（47.30%）であった。

表１：小中高で課外活動を行っていたか

		やっていた		やっていなかった	
		人数	%	人数	%
小学生	団体運動競技	32	34.40	61	65.60
	個人運動競技	30	32.30	63	67.70
	団体文化活動	17	18.30	76	81.70
	個人文化活動	55	59.10	38	40.90
中学生	団体運動競技	25	26.90	68	73.10
	個人運動競技	24	25.80	69	74.20
	団体文化活動	34	36.60	59	63.40
	個人文化活動	40	43.00	53	57.00
高校生	団体運動競技	13	14.00	80	86.00
	個人運動競技	7	7.50	86	92.50
	団体文化活動	34	36.60	59	63.40
	個人文化活動	44	47.30	49	52.70

どのような活動をしていたかについては、以下のとおりである。小学生の時の団体の運動競技では、バレーボール（９名）、バスケットボール（５名）、サッカー（５名）、新体操（２名）、ダンス（２名）、ソフトボール（２名）。以下は回答者が１名であった競技で、綱引き、バレーボール、ダンス、バトミントン、ドッチボール、テニス、ソフトテニス、キックボールであった。小学生の時の個人の運動競技では、水泳（14名）、バトミントン（４名）、テニス（３名）、陸上（３名）、乗馬（２名）、新体操（２名）、卓球（２名）。以下は回答者１名の競技で、クラッシックバレエ、バレエ、空手、剣道、柔道、武道であった。小学生の時の団体の文化活動では、合唱（８名）、吹奏楽（３名）、ダンス（２名）で、以下は回答者1名の活動であり、コーラス、金管バンド、鼓笛、人体交響劇であった。小学生の時の個人の文化活動は、ピアノ（43名）、習字・書道（18名）、そろばん（４名）、英語（２名）、絵画（２名）となった。以下は回答者１名の活動で、詩吟、日

本舞踊、書き方、茶道、和太鼓、エレクトーン、歌であった。

中学生の時の団体の運動競技では、ソフトテニス（６名）、バレーボール（６名）、テニス（３名）、バスケットボール（３名）、サッカー（２名）、ソフトボール（２名）、駅伝（２名）。以下は回答者が１名であった競技で、ダンス、バトミントン、卓球となった。中学生の時の個人の運動競技では、卓球（６名）、バトミントン（５名）、陸上（４名）、テニス（３名）。以下は回答者が１名の競技で、クラシックバレエ、ソフトテニス、バレエ、器械体操、水泳、武道、剣道となった。中学生の時の団体の文化活動では、吹奏楽（24名）、合唱（６名）で、ミュージカル、ダンス、人体交響劇、放送部がそれぞれ１名であった。中学生の時の個人の文化活動では、ピアノ（28名）、習字・書道（８名）、声楽（２名）、絵画（２名）であり、エレクトーン、詩吟、そろばん、塾、茶道がそれぞれ１名であった。

高校生の時の団体の運動競技では、バスケットボール（３名）、ソフトテニス（２名）、バレーボール（２名）、サッカー、ソフトボール、ダンス、バトミントン、ハンドボール、登山競技がそれぞれ１名であった。高校生の時の個人での運動競技では、クラシックバレエ、テニス、バトミントン、器械体操、弓道、卓球、武道がそれぞれ１名ずつであった。高校生の時の団体の文化活動では、吹奏楽（20名）、合唱（３名）、ミュージカル（２名）、ダンス、バンド、ボランティア、演劇、家庭部、書道、人体交響劇、茶道、放送がそれぞれ１名であった。高校生の時の個人の文化活動では、ピアノ（26名）、声楽（５名）、習字・書道（４名）、美術（４名）、茶道（２名）、ＯＡソフト、エレクトーン、ソルフェージュ、バイオリン、絵画、詩吟、写真吹、奏楽、楽器、百人一首、簿記がそれぞれ１名であった。なお、本回答のなかで、ダンスは運動競技に記入されている場合と文化活動に記入されている場合が見受けられたが、回答者の主観を重視しそのまま集計した。また、複数の活動を記入している場合には、すべての活動を集計に加えた。

最後にセルフ・エフィカシー尺度からセルフ・エフィカシー得点を算出した。平均値は、7.05（SD=2.48）であった。坂野（1989）によると、学生のセルフ・エフィカシー得点は５～８点が普通とされており、本協力者の多くは中程度のセルフ・エフィカシーを持っていると考えられる。

＜性別や専攻学科による差、競争心との関係など＞

まず、競争心尺度の負けたくない得点、目立ちたい得点、試したい得点、競争心得点とセルフ・エフィカシー得点との関係を見るために相関係数を求めた。また、無相関の検定を行った。その結果、競争心得点と３つの下位得点とはすべて有意な相関が得られた。また、試したい点とセルフ・エフィカシー得点とに正の有意な相関が認められた。

表２：競争心尺度の得点とＳＦ（セルフ・エフィカシー）尺度の相関の結果

	負けたくない	目立ちたい	試したい	ＳＦ
競争心	.829**	.541**	.592**	.189
負けたくない		.368**	.221*	.091
目立ちたい			-.144	-.159
試したい				.385**

** 相関係数は１％ 水準で有意
＊ 相関係数は５％ 水準で有意

次に、競争心尺度とセルフ・エフィカシー尺度に対して、性別や専攻学科による差が認められるかを、それぞれｔ検定、一元配置分散分析によって分析した。その結果、性差においては、セルフ・エフィカシー尺度においてのみ認められた（$t(91)=2.27$, $p < .05$）。男子のほうが女子よりもセルフ・エフィカシーが高い結果となった。また、有意ではなかったが、目立ちたい得点において有意な傾向が認められ（$t(91)=1.79$, $p < .10$）、女子のほうが男子よりも高得点の傾向がみられた。

表３：各得点の性差の検定結果

得点	性別	度数	平均値	標準偏差	ｔ値	自由度	有意確率
負けたくない得点	男子	10	14.20	2.74	0.56	91	.58
	女子	83	13.48	3.97			
目立ちたい得点	男子	10	18.90	3.14	1.79	91	.08
	女子	83	20.57	2.74			
試したい得点	男子	10	16.10	2.73	0.22	91	.83
	女子	83	15.83	3.72			
競争心	男子	10	49.20	5.94	0.30	91	.77
	女子	83	49.88	6.99			
セルフ・エフィカシー得点	男子	10	8.70	2.00	2.27	91	.03
	女子	83	6.86	2.47			

次に、各得点の学科による差の検定では、競争心得点（$F(2,90)=3.57$, $p < .05$）、試したい得点（$F(2,90)=4.87$, $p < .01$）において有意な差が認められた。下位検定の結果、競争心得点においては、いずれの学科間にも有意差は認められなかったが、音楽科と情報コミュニケーション学科において有意な差の傾向がみられ、音楽科のほうが競争心が高い傾向になることがわかった。試したい得点の下位検定では、音楽科と情報コミュニケーション学科において有意な差が認められ、音楽科のほうが有意に得点が高かった。

表４：各得点の学科による差の検定

得点	学科	度数	平均値	標準偏差	自由度	F値	有意確率
競争心	美術科	4	54.75	11.06	2	3.57	.03
	音楽科	36	51.47	6.24	90		
	情報コミュ	53	48.30	6.62			
負けたくない得点	美術科	4	16.50	5.00	2	3.02	.05
	音楽科	36	14.33	4.15	90		
	情報コミュ	53	12.81	3.40			
目立ちたい得点	美術科	4	21.50	3.11	2	0.91	.41
	音楽科	36	19.94	2.63	90		
	情報コミュ	53	20.60	2.92			
試したい得点	美術科	4	16.75	3.50	2	4.87	.01
	音楽科	36	17.19	3.33	90		
	情報コミュ	53	14.89	3.57			
セルフエフィカシー得点	美術科	4	4.75	1.71	2	2.19	.12
	音楽科	36	7.42	2.49	90		
	情報コミュ	53	6.98	2.45			

最後に、過去の課外活動の有無によって競争心やセルフ・エフィカシーに差があるかどうかを見るために、小中高ぞれぞれにおいて団体の運動競技、個人の運動競技、団体の文化活動、個人の文化活動の有無による各得点の差の検定を行った。その結果、有意な差が認められたのは、小学生時の団体の文化活動の有無における負けたくない得点($t(91)=2.02$, $p < .05$)と競争心得点($t(91)=2.39$, $p < .05$)、小学生時の個人の文化活動の有無における試したい得点($t(91)=3.86$, $p < .01$)と競争心得点($t(91)=2.73$, $p < .01$)、中学生時の個人の文化活動の有無における試したい得点($t(91)=2.35$, $p < .05$)であった。いずれにおいても、活動の経験がある人のほうが得点が高かった。また、小学生時の団体の文化活動の有無における目立ちたい得点、中学生時の団体の文化活動の有無における負けたくない得点、高校生時の団体の文化活動の有無における試したい得点に有意な差の傾向がみられた。いずれにおいても、活動の経験がある人のほうが得点が高かった。

表5：活動経験の有無による競争心とセルフ・エフィカシーの差の検定の結果

得点	小団体運動	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	32	13.38	3.11	0.332	91	.74
	やっていない	61	13.66	4.21			
目立ちたい得点	やっていた	32	20.34	2.54	0.107	91	.92
	やっていない	61	20.41	2.97			
試したい得点	やっていた	32	16.59	3.73	1.425	91	.16
	やっていない	61	15.48	3.52			
競争心	やっていた	32	50.31	6.90	0.513	91	.61
	やっていない	61	49.54	6.88			
セルフエフィカシー得点	やっていた	32	7.25	2.58	0.551	91	.58
	やっていない	61	6.95	2.44			
得点	小個人運動	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	30	13.63	4.06	0.127	91	.9
	やっていない	63	13.52	3.78			
目立ちたい得点	やっていた	30	20.47	2.62	0.187	91	.85
	やっていない	63	20.35	2.92			
試したい得点	やっていた	30	16.33	3.33	0.869	91	.39
	やっていない	63	15.63	3.75			
競争心	やっていた	30	50.43	7.29	0.606	91	.55
	やっていない	63	49.51	6.68			
セルフエフィカシー得点	やっていた	30	7.03	2.65	0.055	91	.96
	やっていない	63	7.06	2.42			
得点	小団体文化	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	17	15.24	3.44	2.018	91	.05
	やっていない	76	13.18	3.86			
目立ちたい得点	やっていた	17	21.59	2.45	1.978	91	.05
	やっていない	76	20.12	2.83			
試したい得点	やっていた	17	16.47	3.63	0.768	91	.44
	やっていない	76	15.72	3.62			
競争心	やっていた	17	53.29	5.84	2.378	91	.02
	やっていない	76	49.03	6.86			
セルフエフィカシー得点	やっていた	17	7.18	2.86	0.225	91	.82
	やっていない	76	7.03	2.41			
得点	小個人文化	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	55	13.87	4.04	0.944	91	.35
	やっていない	38	13.11	3.57			
目立ちたい得点	やっていた	55	20.51	2.82	0.501	91	.62
	やっていない	38	20.21	2.83			
試したい得点	やっていた	55	16.98	3.32	3.861	91	.01
	やっていない	38	14.24	3.44			
競争心	やっていた	55	51.36	6.67	2.725	91	.01
	やっていない	38	47.55	6.57			
セルフエフィカシー得点	やっていた	55	7.27	2.56	1.026	91	.31
	やっていない	38	6.74	2.34			
得点	中団体運動	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	25	12.84	3.28	1.093	91	.28
	やっていない	68	13.82	4.03			
目立ちたい得点	やっていた	25	20.28	2.84	0.221	91	.83
	やっていない	68	20.43	2.83			
試したい得点	やっていた	25	15.84	3.83	0.033	91	.97
	やっていない	68	15.87	3.57			
競争心	やっていた	25	48.96	7.33	0.72	91	.47
	やっていない	68	50.12	6.70			
セルフエフィカシー得点	やっていた	25	7.00	2.66	0.126	91	.9
	やっていない	68	7.07	2.43			
得点	中個人運動	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	24	12.58	4.68	1.449	91	.15
	やっていない	69	13.90	3.49			
目立ちたい得点	やっていた	24	20.29	2.85	0.192	91	.85
	やっていない	69	20.42	2.82			
試したい得点	やっていた	24	15.71	3.63	0.238	91	.81
	やっていない	69	15.91	3.64			
競争心	やっていた	24	48.58	7.54	1.015	91	.31
	やっていない	69	50.23	6.61			
セルフエフィカシー得点	やっていた	24	6.46	2.15	1.373	91	.17
	やっていない	69	7.26	2.57			

得点	中団体文化	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	34	14.50	3.93	1.81	91	.07
	やっていない	59	13.02	3.73			
目立ちたい得点	やっていた	34	20.50	2.54	0.292	91	.77
	やっていない	59	20.32	2.98			
試したい得点	やっていた	34	16.29	3.43	0.877	91	.38
	やっていない	59	15.61	3.73			
競争心	やっていた	34	51.29	7.07	1.602	91	.11
	やっていない	59	48.95	6.64			
セルフエフィカシー得点	やっていた	34	7.59	2.45	1.592	91	.12
	やっていない	59	6.75	2.46			
得点	中個人文化	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	40	14.18	4.36	1.345	91	.18
	やっていない	53	13.09	3.39			
目立ちたい得点	やっていた	40	19.98	2.83	1.231	91	.22
	やっていない	53	20.70	2.78			
試したい得点	やっていた	40	16.85	3.56	2.349	91	.02
	やっていない	53	15.11	3.51			
競争心	やっていた	40	51.00	7.19	1.467	91	.15
	やっていない	53	48.91	6.52			
セルフエフィカシー得点	やっていた	40	7.18	2.54	0.408	91	.68
	やっていない	53	6.96	2.45			
得点	高団体運動	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	13	13.46	2.99	0.098	91	.92
	やっていない	80	13.58	3.99			
目立ちたい得点	やっていた	13	20.31	3.04	0.109	91	.91
	やっていない	80	20.40	2.80			
試したい得点	やっていた	13	16.08	2.75	0.232	91	.82
	やっていない	80	15.83	3.75			
競争心	やっていた	13	49.85	5.61	0.022	91	.98
	やっていない	80	49.80	7.07			
セルフエフィカシー得点	やっていた	13	6.31	2.29	1.173	91	.24
	やっていない	80	7.18	2.50			
得点	高個人運動	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	7	13.57	4.04	0.009	91	.99
	やっていない	86	13.56	3.86			
目立ちたい得点	やっていた	7	20.86	2.67	0.458	91	.65
	やっていない	86	20.35	2.84			
試したい得点	やっていた	7	17.00	4.36	0.866	91	.39
	やっていない	86	15.77	3.56			
競争心	やっていた	7	51.43	8.90	0.649	91	.52
	やっていない	86	49.67	6.71			
セルフエフィカシー得点	やっていた	7	6.71	1.70	0.375	91	.71
	やっていない	86	7.08	2.54			
得点	高団体文化	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	34	14.26	3.74	1.347	91	.18
	やっていない	59	13.15	3.89			
目立ちたい得点	やっていた	34	20.03	2.88	0.93	91	.36
	やっていない	59	20.59	2.78			
試したい得点	やっていた	34	16.71	3.79	1.73	91	.09
	やっていない	59	15.37	3.45			
競争心	やっていた	34	51.00	6.95	1.279	91	.2
	やっていない	59	49.12	6.76			
セルフエフィカシー得点	やっていた	34	7.47	2.50	1.235	91	.22
	やっていない	59	6.81	2.45			
得点	高個人文化	度数	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
負けたくない得点	やっていた	44	14.05	4.35	1.16	91	.25
	やっていない	49	13.12	3.33			
目立ちたい得点	やっていた	44	20.66	2.41	0.88	91	.38
	やっていない	49	20.14	3.14			
試したい得点	やっていた	44	16.27	3.34	1.04	91	.3
	やっていない	49	15.49	3.84			
競争心	やっていた	44	50.98	6.82	1.57	91	.12
	やっていない	49	48.76	6.79			
セルフエフィカシー得点	やっていた	44	7.05	2.46	0.03	91	.98
	やっていない	49	7.06	2.52			

考　察

＜課外活動に関する傾向＞

課外活動に関しては、運動競技については団体競技・個人競技を問わず、小学生→中学生→高校生と学年が上がるごとに経験者が少なる傾向にあった。特に高校生ではかなり少なかった。一方、文化活動については大きな変化はなかった。団体での文化活動も、中学・高校での変化はほとんどなく、個人の文化活動も大きな減少はなかった。このような傾向は、本調査対象者の１/３程度が音楽科の学生であったことも大きい。音楽専攻の学生は、ピアノをはじめとした楽器や歌などのレッスンを受けていることが多い。そのためにこのような結果になったと考えられる。本調査の結果を見てみると、運動競技において、中学・高校での継続が少ないことが目についた。また、高校生になってから吹奏楽を始めるなど、文化活動においても部活動と思われる活動では継続性が少なかった。一方、個人の文化活動では継続されているものが多く、ピアノと習字・書道は特に続けている学生が多かった。

＜性別・学科での差について＞

セルフ・エフィカシー得点において、男子のほうが女子よりも平均値が高かった。本学では男子学生は全体の10％程度であり、女子学生のほうが元気があるように思わるが、行動における遂行可能性の確信については男子学生のほうが高い傾向にあることがわかった。

また、学科による差を見てみると、競争心尺度においては、いずれの得点においても情報コミュニケーション学科の学生が他学科の学生よりも得点が低い結果となった。これにはいくつかの要因が考えられる。一つは、美術科では作品の講評などで他者と比べられる機会があり、また音楽科でも演奏会への出演におけるオーディションなどがあり、競争を経験する機会がある。一方、情報コミュニケーション学科では、学科内での競争場面が少ない。よって、情報コミュニケーション学科の競争心尺度の得点が低くなったものと考えられる。また、本被験者の美術科・音楽科の学生は教職課程受講者であり、もともと向上心が高い学生が多いため、競争心も高くなったものと思われる。一方、情報コミュニケーション学科の調査協力者は、コミュニケーション心理学の受講者が主であり、もともと競い合うことなどを好まない学生が多かったものと推測できる。

＜競争心との関係＞

課外活動の有無については、予想を反して運動競技の経験の有無よりも文化活動の経験の有無のほうが競争心との関連が多くみられた。この結果は、先述した通り調査協力者の１/３強が音楽専攻の学生であったことも大きいと思われる。特に個人の文化活動においては、習い事としてというだけでなく、コンコールなどでの入賞を目指しているケースも多かったのではないかと推測される。したがって、競争場面を経験することが多かったと考えられるため、競争心尺度の得点が高くなったものと考えられる。

引用文献

坂野雄二・東條光彦　1986「一般的セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」行動療法研究, 12, 73-82

関口洋美　1998「一般的競争心尺度開発の試み」日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 286

戸倉千遥・菅千索　2014「大学生のセルフ・エフィカシーに影響を与える要因について」和歌山大学教育学部紀要　教育科学,　第64集,　31-40

文部科学省ホームページ　平成14年度文部科学白書　第２章
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200201/index.html, 2016/12/10アクセス